

令和4年度奨学金の返還者に関する属性調査結果【概要】

I 調査目的等

1 目的

奨学金返還者の状況を把握し、奨学金回収方策の検討のための基礎資料を得る。

2 調査対象

(1) 令和4年12月末において、奨学金返還を3か月以上延滞している者（以下「延滞者」という。）から無作為抽出した15,584人。

(2) 令和4年12月末において、奨学金返還を延滞していない者（以下「無延滞者」という。）から無作為抽出した8,585人。

3 調査方法

質問を記入した調査票を送付し、返信用封筒により返送を依頼した。

4 調査時期

令和5年2月

5 回答受入状況

	抽出人数	回答人数	回答率	参考母数（令和4年度末）
延滞者	15,584 人	1,601 人	10.3%	131 千人
無延滞者	8,585 人	1,414 人	16.5%	4,431 千人

※ 回答人数には無回答・不明回答を含まない。

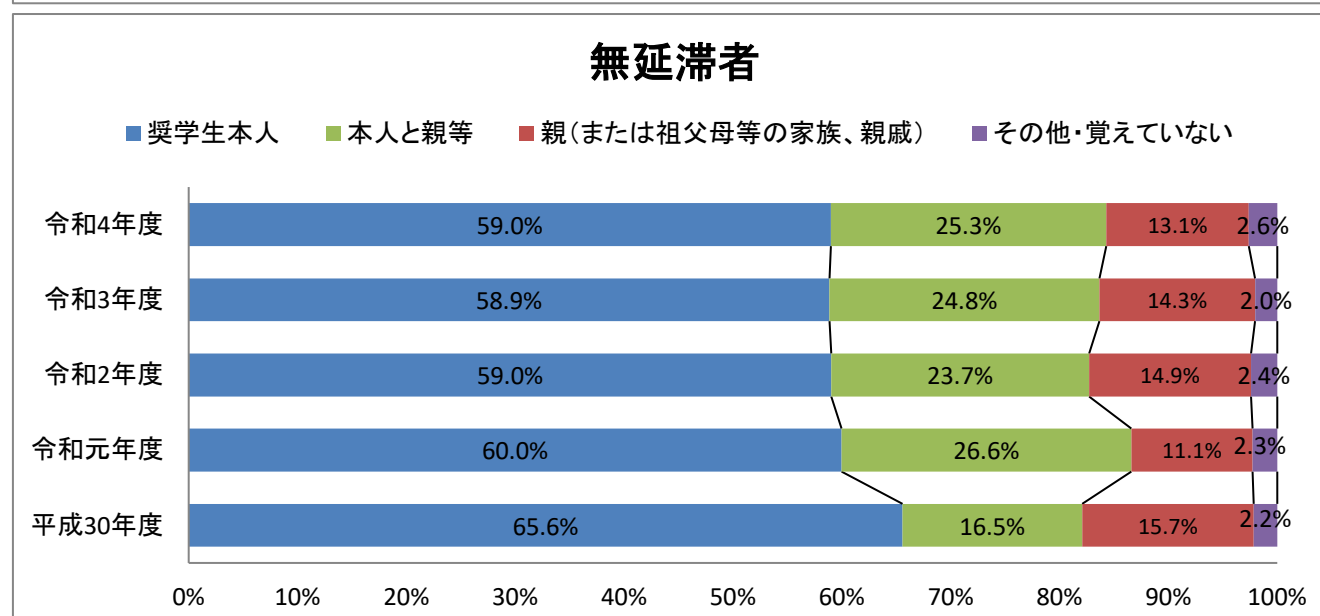
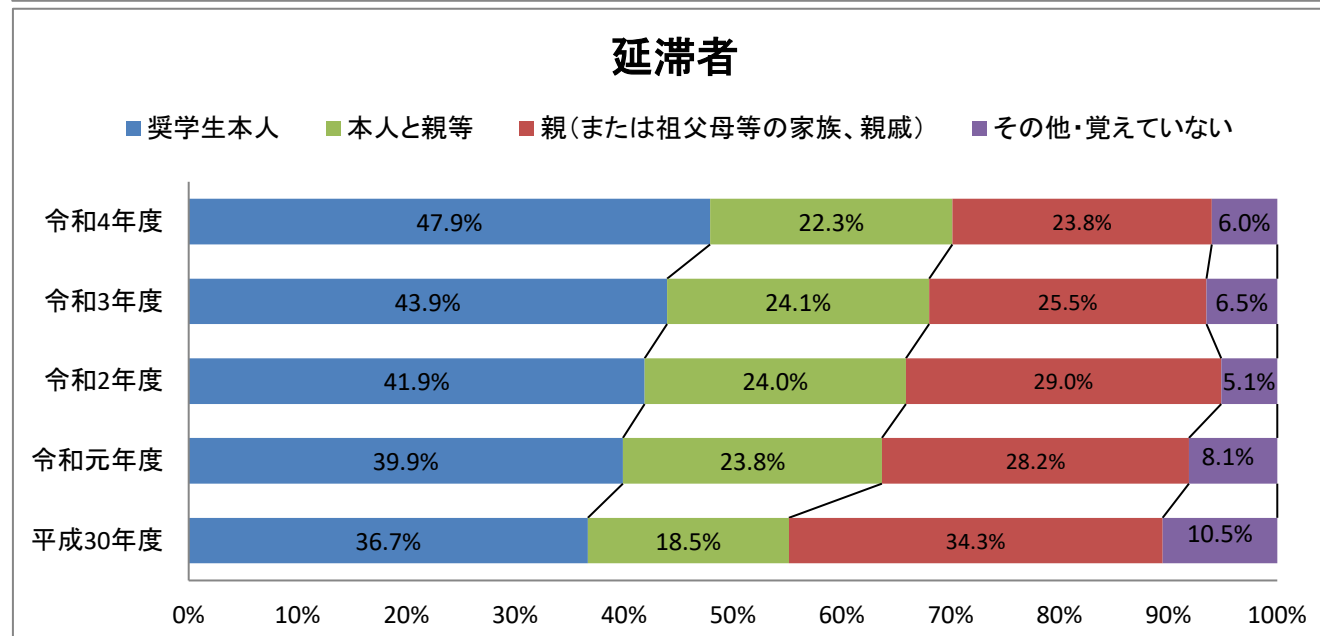
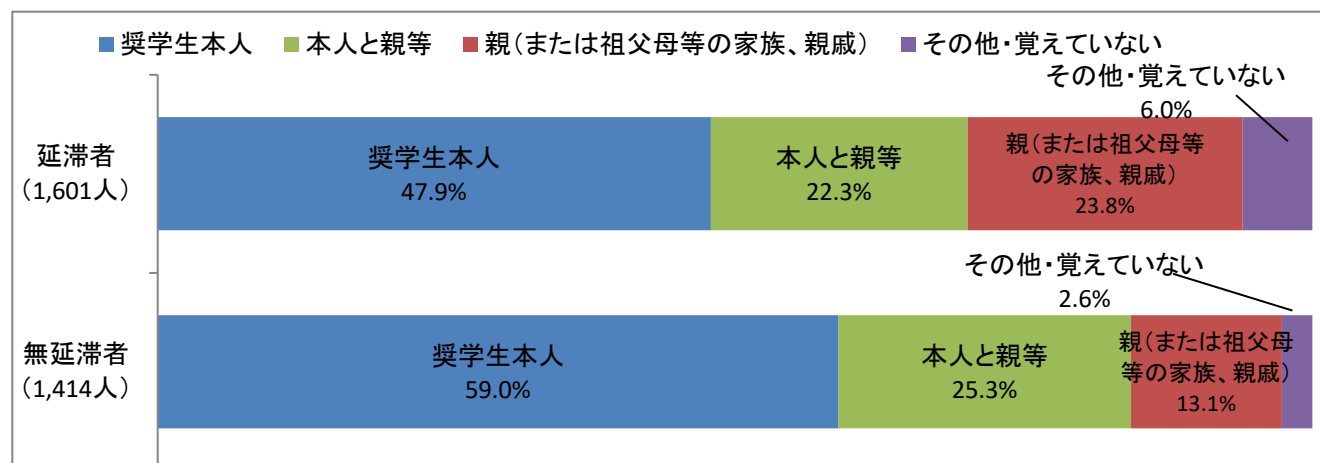
Ⅱ．結果の概要

1 在学中の手続き等に関すること

(1)奨学金申請時に申込手続き（書類作成や入力作業）を行った者（択一）

奨学金申請時の申込手続きを「奨学生本人」が行った比率は、無延滞者では59.0%であるのに対し、延滞者では47.9%と低い。また、「奨学生本人」と「本人と親等」を合わせてみても、無延滞者では84.3%であるのに対し、延滞者では70.2%しか申請時の申込手続きに奨学生本人が関わっていない。延滞者は無延滞者に比べて、親等が申請時の申込手続きを行った比率が高い。

図1－1 奨学金申請時の申込手続きを行った者（択一）

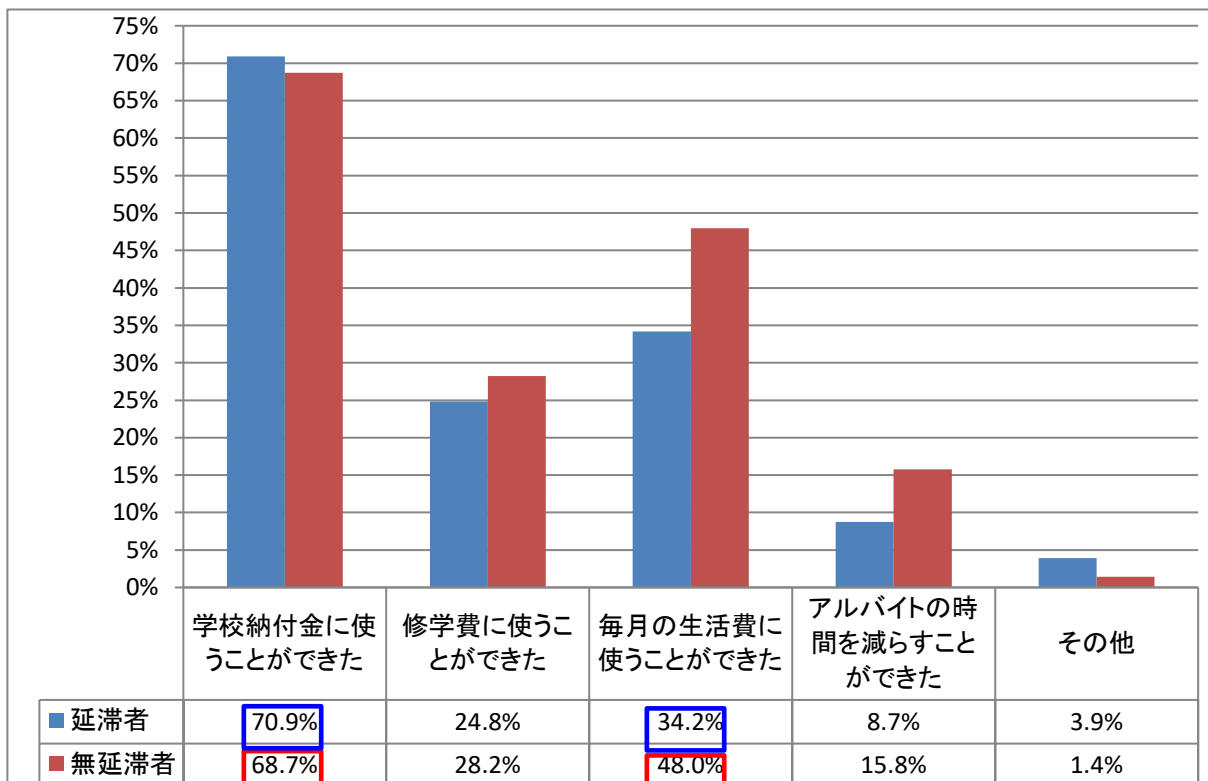


(2)奨学金はどのように役に立ったか（複数回答）

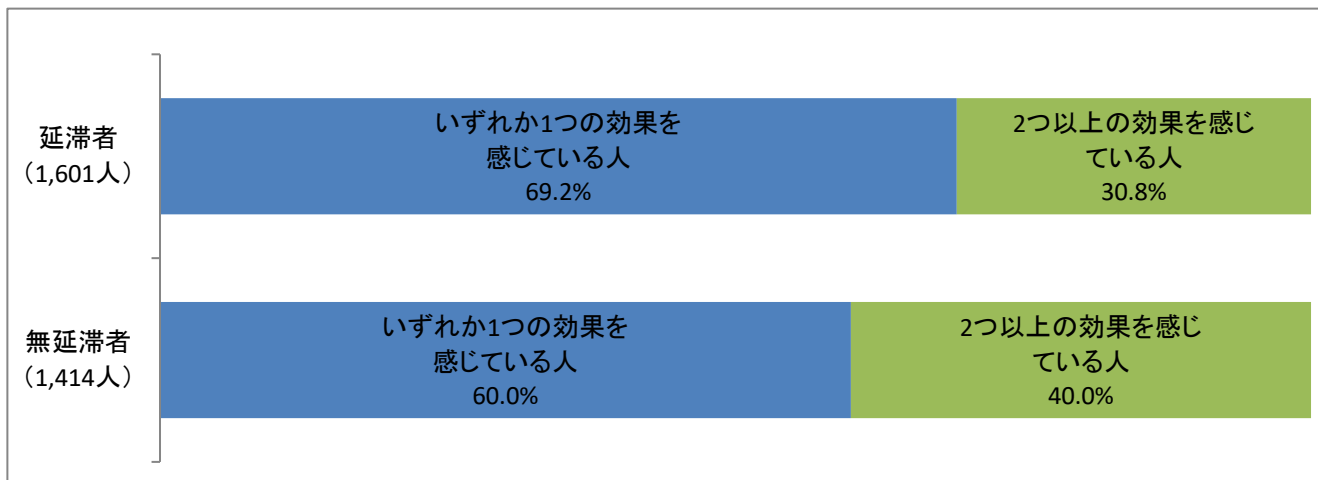
奨学金がどのように役に立ったかについて、延滞者、無延滞者ともに「授業料等の学校納付金に使うことができた」が最も高い。また、延滞者、無延滞者ともに、「毎月の生活費に使うことができた」が2番目に高い。

※比率は回答者数に対する比率。複数回答のため、合計は100%を超える。

図1－2 奨学金がどのように役に立ったか（あてはまるものを全て選択）



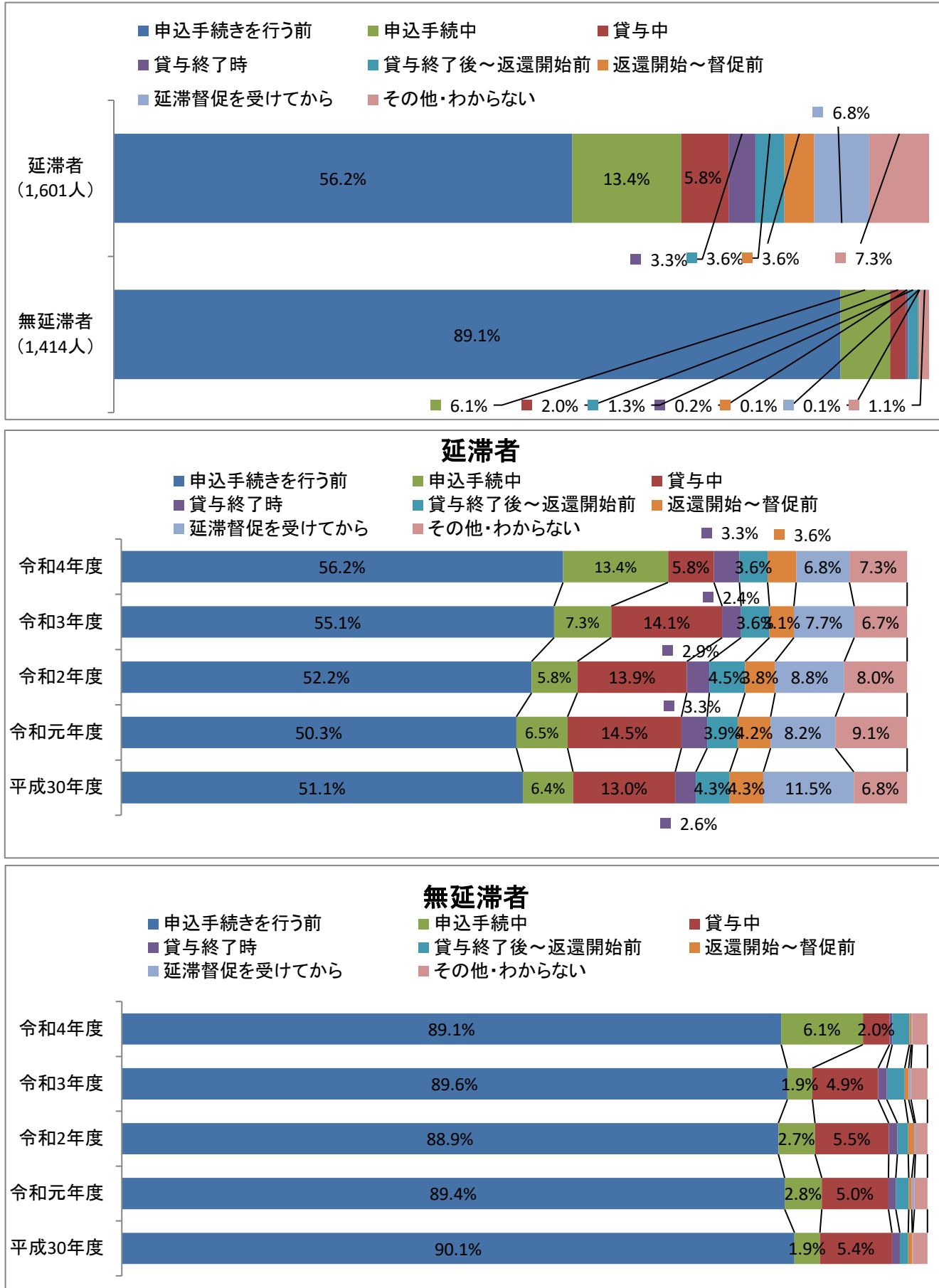
回答者のうち、2つ以上の効果を感じている者は、延滞者では30.8%、無延滞者では40.0%である。



(3)返還義務を知った時期（択一）

返還義務を知った時期は、無延滞者は「申込手続きを行う前」が89.1%であるのに対し、延滞者では56.2%にとどまり、申込手続きまでの認識が十分でないことがうかがえる。また、延滞者では、貸与終了後に返還義務を知った者の合計は14.0%で、そのうち約半数の6.8%は「延滞督促を受けてから」知ったと回答している。

図1－3 返還義務を知った時期（択一）

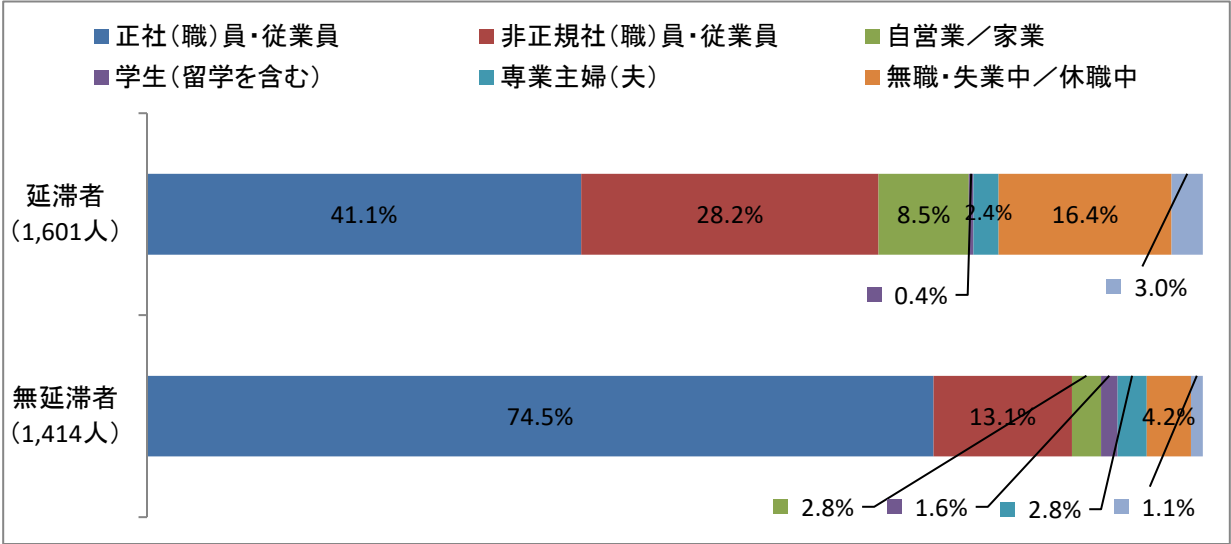


2 奨学生の職業・年収

(1)奨学生本人の職業（択一）

奨学生本人の職業は、延滞者では「正社（職）員・従業員」41.1%、「非正規社（職）員・従業員」28.2%、「無職・失業中／休職中」16.4%であるのに対し、無延滞者では「正社（職）員・従業員」74.5%、「非正規社（職）員・従業員」13.1%、「無職・失業中／休職中」4.2%で、無延滞者の方が延滞者より安定した就業状況にあるといえる。

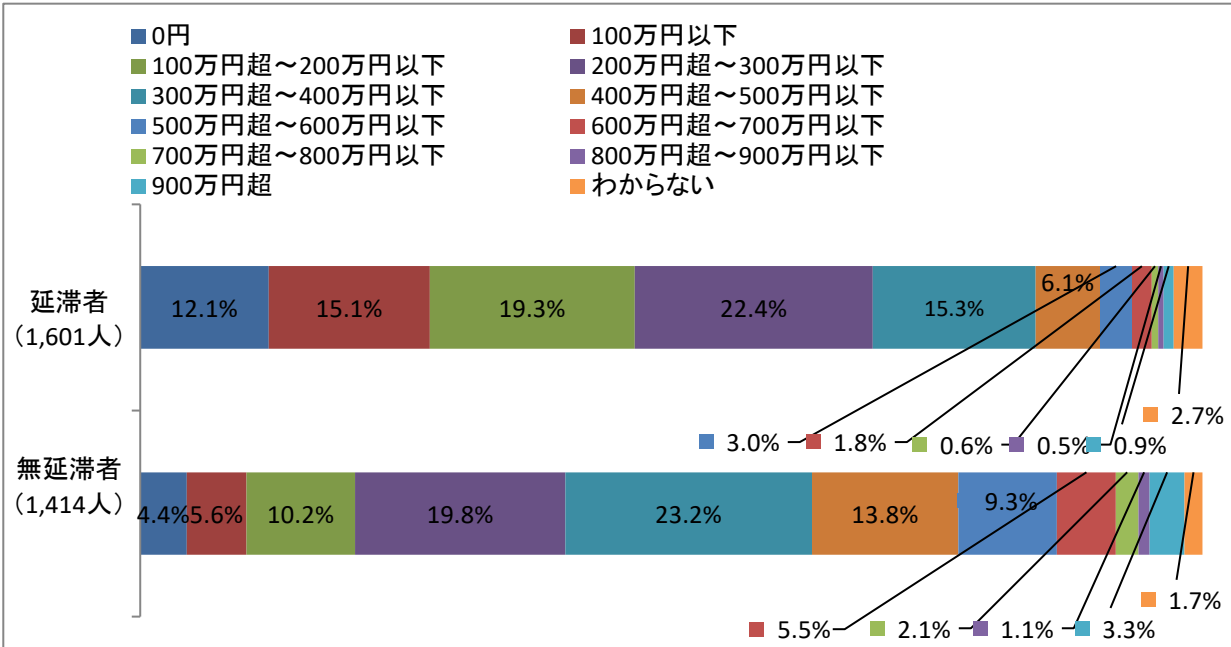
図 2－1 奨学生本人の職業（択一）



(2)奨学生本人の年収（択一）

奨学生本人の年収について、「300万円以下」の比率は、延滞者では合計69.0%であるのに対し、無延滞者では合計40.0%と大きな差がみられる。

図 2－2 奨学生本人の年収（択一）

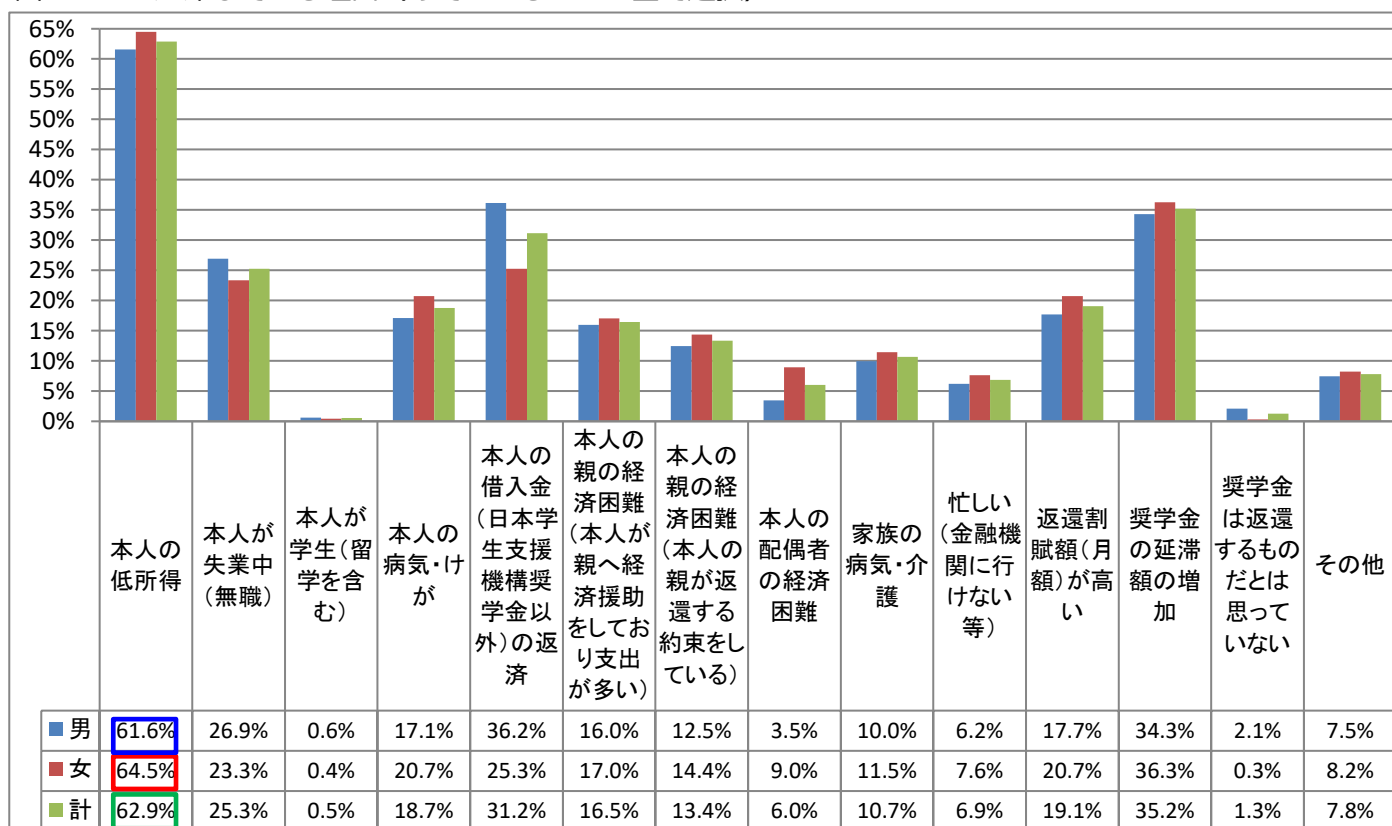


3 延滞の状況

(1)延滞している理由（複数回答）

調査時点で延滞中の者に、延滞している理由を質問した。延滞している理由は、「本人の低所得」が62.9%で最も高く、次いで「奨学金の延滞額の増加」が35.2%である。男女別でみると、男性は女性に比べて「本人の借入金（日本学生支援機構奨学金以外）の返済」の比率が高い。また、「奨学金の延滞額の増加」は男女ほぼ同率となっている。

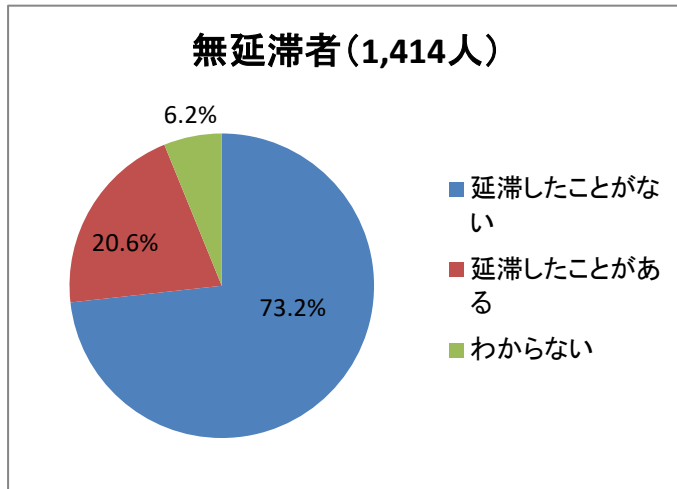
図3－1 延滞している理由（あてはまるものを全て選択）



(2)延滞経験の有無 ※無延滞者のみ

調査時点で無延滞の者に、これまでに延滞したことがあるかを質問した。
「延滞したことがある」者は20.6%である。

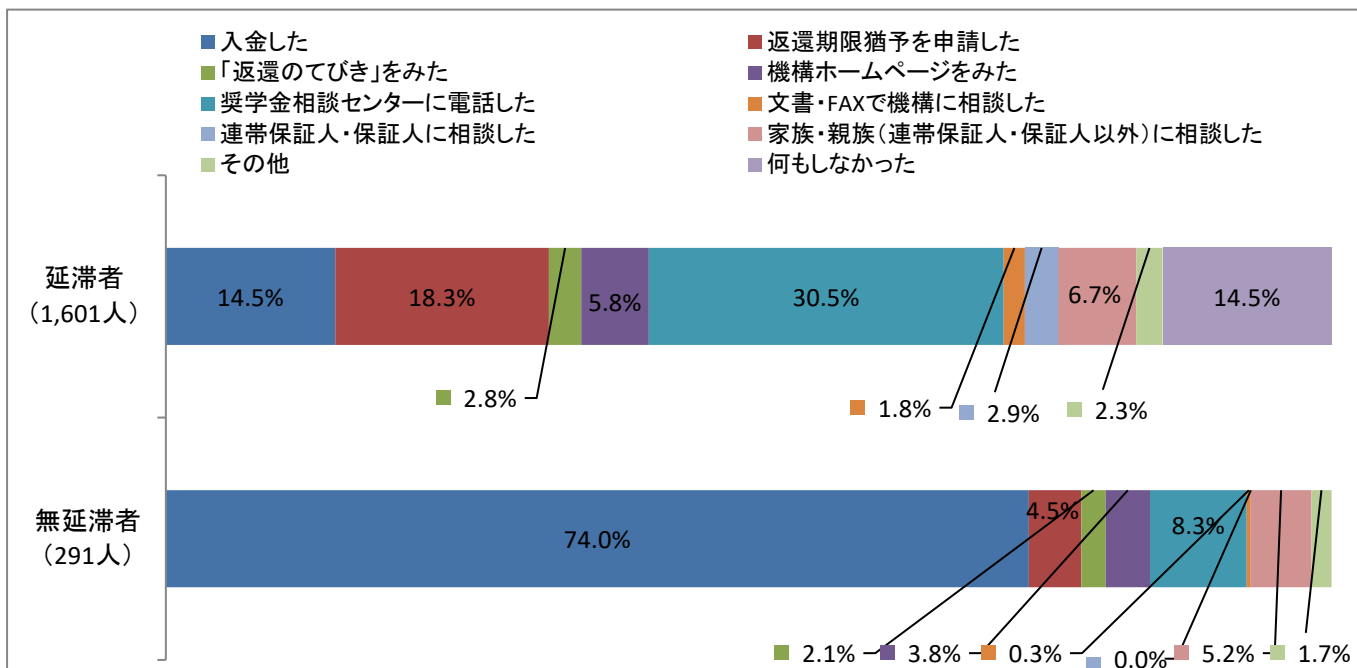
図 3 - 2 延滞経験の有無（択一）



(3)延滞をしたときに最初にしたこと（択一）

調査時点で延滞中の者および無延滞者で「延滞したことがある」と回答した者に、延滞したときに最初に行ったことを質問した。無延滞者は「入金した」が74.0%で最も高いのに対し、延滞者は「奨学金相談センターに電話した」が30.5%で最も高い。

図 3 - 3 延滞をしたときに最初にしたこと（択一）

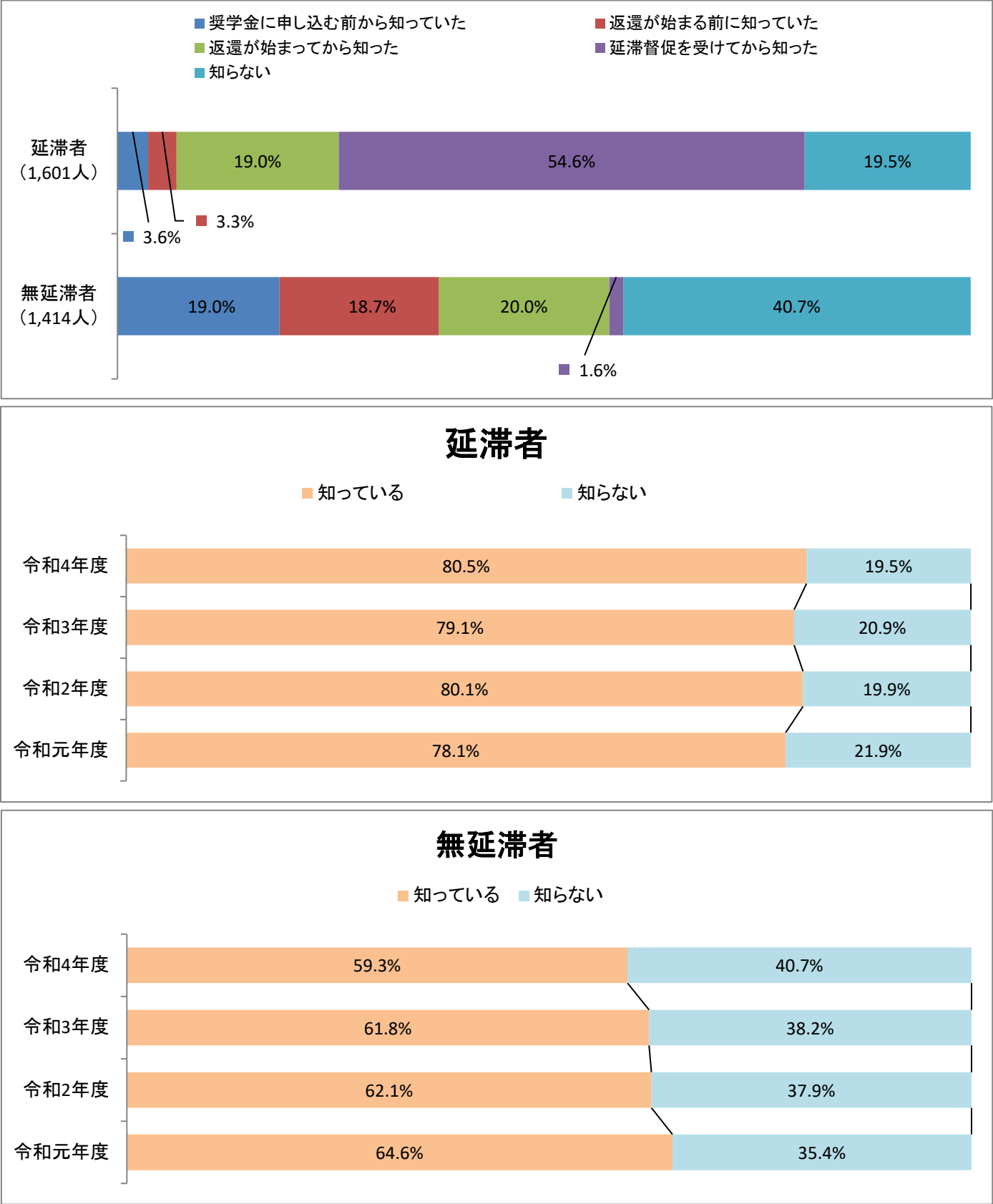


4 返還期限猶予制度・減額返還制度について

(1)返還期限猶予制度の認知状況（択一）

返還期限猶予制度の認知率は、延滞者で80.5%、無延滞者で59.3%である。ただし、返還が始まる前までに認知していた比率は、無延滞者では合計で37.7%であるのに対し、延滞者では6.9%と大きな差がみられる。また、延滞者では「延滞督促を受けてから知った」比率が54.6%と、無延滞者に比べて高い。

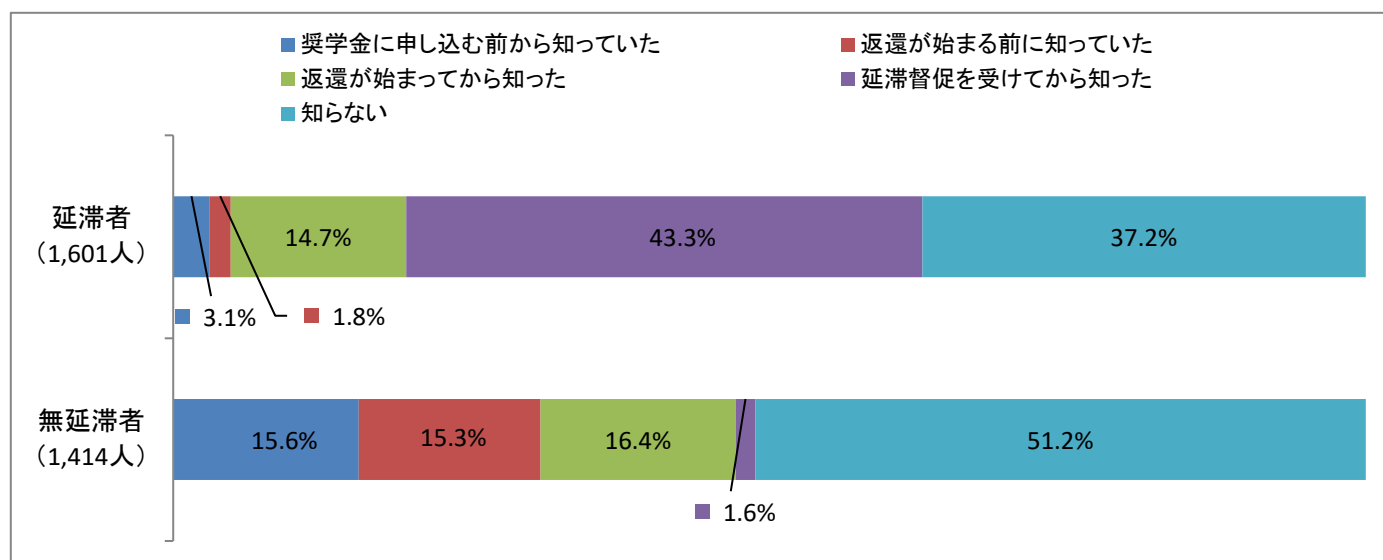
図 4 - 1 返還期間猶予制度の認知状況（択一）



(2)減額返還制度の認知状況（択一）

減額返還制度の認知率は、延滞者で62.8%、無延滞者で48.8%である。ただし、返還が始まる前までに認知していた比率は、無延滞者では合計で30.8%であるのに対し、延滞者では4.8%と大きな差がみられる。また、延滞者では「延滞督促を受けてから知った」比率が43.3%と無延滞者に比べて高い。

図４－２ 減額返還制度の認知状況（択一）



(3)減額返還制度を何で知ったか（複数回答）

減額返還制度を知っている者（「奨学金に申し込む前から知っていた」＋「返還が始まる前に知っていた」＋「返還が始まってから知った」＋「延滞督促を受けてから知った」）に、減額返還制度を何で知ったかを質問した。延滞者は「機構からの通知」、「奨学金相談センター」で減額返還制度を知った比率がそれぞれ35.5%、16.6%で高く、無延滞者は「返還のてびき」、「奨学金申請時・採用時の資料」、「機構のホームページ」で減額返還制度を知った比率がそれぞれ46.6%、40.6%、22.6%で高い。

図４－３ 減額返還制度をなにで知ったか（あてはまるものを全て選択）

